

時代をリードする保育実践・研究者の保育観や「構え」はどのように形成されたか
—ある保育者（実践研究者）のライフストーリーを通して—

田甫綾野
(日本女子大学大学院)

はじめに

宍戸健夫(1988)は、これまで実践者である保育者の視点からの保育史研究が少ないことを指摘し、今後の保育研究、保育実践のためにも過去の保育実践を明らかにする必要があると述べている¹。このような点からも、筆者は戦後の保育実践について明らかにする必要があると考え、戦後の保育実践がどのように行われてきたのかについて研究をすすめてきた。具体的には、保育者のライフストーリーを通して、昭和23年に刊行された保育要領と、昭和31年に刊行された幼稚園教育要領を当時の保育者たちがどのようにうけとめて、どのように実践してきたのかについて、明らかにすることを試みた^{2,3}。これは、グッドソン(2001)が「ライフストーリーは、学校の方針やカリキュラムが教師によって受容され、実施される過程を検討する研究手段のひとつである」と位置づけていることから妥当であると思われる⁴。先述の研究を通して、保育者たちは、新しい理論や制度を受け入れ、それを実践する際、持ち合わせている保育観や保育に対する「構え」が大きな意味をもっているということを論じてきた。

そこで本研究では、ある保育者のライフストーリーを通して、この保育観や「構え」を保育者がどのように、獲得していったのかについて考えたい。結論を先取りすれば、それは、養成校での被教育経験や、保育者・教師としての経歴、現職教育など、また幼少期を含めた長い歴史の中で培われるものであると考える。このことを保育者のライフストーリーを用いて明らかにしたい。

なぜ保育者の保育観や保育に対する構えを明らかにすることが必要なのか

昭和31年の幼稚園教育要領刊行当時の保育について、山村きよや坂元彦太郎らは「小学校的」になったとし、必ずしも肯定的に評価されてはいない。しかし、その評価が果たして妥当といえるのか、また、なぜそのような保育が実践されることとなったのかについて、具体的には指摘されていない。そこで、筆者はそれらについて、当時の保育者たちのライフストーリーから明らかにすることを試みた。つまりどのような保育が「小学校的」と評されていたのか、またなぜそのような保育が行われたのかについて明らかにすることを試

みたのである。その結果、確かに当時の保育者たちは「小学校的」と評されてしまうような保育を行っていたということができた。しかし、当時の保育者たちが安易に幼稚園教育要領の内容を解釈した(例えば、領域を教科としてとらえた…六領域を時間割として小学校以上の学校の授業のように行ったなど)とは考察できなかった。なぜなら、当時の保育者たちは、幼稚園教育要領で示されている内容を肯定的に評価し、それを理解しようと努め、戦後の「自由保育」という考え方を実践しようとしていたからである。

このように、保育者たちは、保育制度や思想、理論を肯定的に受けとめていたとしても、その内容を完全に理解し、実践するということとは必ずしもつながりなかったといえる。なぜなら、実践者である保育者たちは、自分たちがそれまでに持ち合わせている保育観や保育に対する「構え」をもって、新しい理論や制度を受け入れるからである⁵。つまり、保育観や保育に対する「構え」は、必ずしも思想や制度によって変えられるものでないといえる。だとすれば、この保育観や「構え」がどのように形成され、変化されていくのかを明らかにする必要があると考える。

保育者や教師の保育観や「構え」はどのように形成されるのか

保育者ではないものの、教師の力量形成とライフストーリーの関係についての研究はいくつか行われている。例えば、稲垣忠彦(1988)らによる教師のライフコースに関する研究では、あるコーホートを対象に、彼らのライフコースと教師としての変化、成長、力量形成にどのような関係があるかについて論じている。ここでは、彼らの教師としての教育観や力量の形成が、彼らの生まれた時代や生育歴等との関連で論じられている。このように、教師としての力量や教育観の形成が、養成校での被教育経験や現職教育に限ってはいないということが明らかにされている⁶。

このことから、保育者の保育観や「構え」は彼らの人生における様々な経験を通じて形成されるものであり、思想や制度の変化や教員養成の場においてのみ変化するものではないと考えられる。しかし、稲垣らの研究はライフコース研究であり、一人の教師を長いスパンでおったものではない。そのため筆者は、ある保

育者のライフストーリーと、彼の当時の実践に関する資料との検討を通して、彼の保育観や「構え」がどのように形成され、変化されていったのかについて考えたい。そこで本研究では、幼稚園教育要領にかならずしもはられることなく教育活動を行ったある保育者（実践研究者）を事例に論じたい。

保育者のライフストーリーからみる保育観と「構え」の形成について—Aさんの事例を通して—

Aさんの略歴

大正5(1916)年生まれ、大正12(1923)年に某女子高等師範学校附属小学校に入学する。その後、昭和6(1931)年に師範学校に入学し、専攻科に進む。昭和12(1937)年に卒業し、市立の尋常小学校の訓導となる。昭和17(1942)年卒業した師範学校の附属小学校に勤務する。昭和25(1950)年退職し、私立小学校、同幼稚園の教育にたずさわることになる。昭和40(1965)年短大へ移り、翌年附属幼稚園主事に、その翌年には園長となる。昭和63(1988)年定年により退職する。

〈事例1〉後で私の教育実践の基盤になるのが、やっぱり大正自由主義教育なんです。それが、ちょうど僕らが小学校教育のころが大正自由主義教育が現場の先生たちをくすぐっていた頃ですね。で、物に書かれてるほど思想統制がまだ表に出てこないころ。殊に私は幸か不幸か附属にいたから、若干治外法権。その師範学校の付属にいたから。比較的自自由っていうことと。(中略)地盤としては、わりあい大正自由主義教育ってのが、教育現場の中で。だから、童話とか童謡とか劇活動とか、そういうことは小学校で非常に先生たちはやり始めた時ですかね。僕らの世代は。短い間ですけどね。

〈事例2〉子どもたちと、生活に取り組む基盤になるのは、いわゆる教科学習に適合しない子どもばかりの学校を選んだ。今で言うと、落ちこぼれの連中に行き会う。だから、幼児教育じゃないけど、読み書きそろばんで果たして、人間が人間になりうるだろうかというのありましたよね。(中略)40何名かの女の子で、教育ってというのは、読み書きそろばんを中核とした。今、国が要求しているような形態の教育では人間は育たないのではないかというそこはかたない問題意識みたいなものがありましたね。だから、戦争中はこれが後の私の教育計画の基盤になるんだけど、教えることをどうやって、教師がひっこめて、学ばせるかっていう。それは、生活とか、活動以外にないんじゃないかってことね。(中略)小学校でやったことをもう一遍幼児版でやったら良いんじゃないか。彼らは、

結局自分たちで作っていくよと。教えんじゃねえよって思えたの。

〈考察〉

〈事例1〉から、Aさんは自分自身が保育や教育を行う上で、自らの被小学校教育(大正自由主義教育)の影響を受けていると述べている。また〈事例2〉からは、最初に赴任したあまり勉強熱心ではない地域の小学校での子どもたちとの関係の中で培ったAさんの教育に対する考え方を読み取ることができる。そしてさらにAさんは、その小学校での体験を幼稚園教育のなかでもいかしていることを述べている。これらのことから、Aさんは、幼稚園教育要領などの制度によって、自らの保育観や「構え」を形成しているのではなく、被教育経験または自らの教育実践を通して、それらを培っているということが分かる。

つまり、思想や制度の変化によって自分自身の実践を変えなければならないということになったとしても、それに伴って保育観や「構え」までも変えるということはないといえるだろう。保育観や「構え」は長い時間をかけて形成されるものなのである。また当日は、当時の実践に関する資料も含めて考察したい。

おわりに

このように、保育者はそれぞれ保育観や「構え」をもっている。そしてそれは、思想や制度が変化することによって変わっていくものではなく、それぞれの人生、被教育経験、教育活動などを通して培われていくものなのである。だからこそ、理論や制度の内容を肯定的に評価したとしても、それを自分なりに解釈していくことになるのである。これらのことから、保育者養成や現職教育の場においても、このような視点を取り入れていくことが必要なのではないだろうかと考える。

¹ 宍戸健夫(1988)「日本の幼児保育」青木書店

² 拙稿(2004刊行予定)「保育者は保育要領をどのようにうけとめたのか—ライフストーリーにみられる保育者の日常的構えをとおして—」日本女子大学大学院紀要家政学研究科人間生活学研究科第10号

³ 日本教育方法学会第39回大会(於滋賀大学)自由発表「昭和31年版幼稚園教育要領は保育現場でどのようにうけとめられたか—保育者のライフストーリーを通して」2003年

⁴ グッドソン著藤井泰ら訳(2001)「教師のライフヒストリー—「実践」から「生活」の研究へ—」晃洋書房

⁵ 前掲3

⁶ 稲垣忠彦、寺崎昌男、松平信久編(1988)「教師のライフコース—昭和史を教師として生きて—」東京大学出版会